

1. 嘉納治五郎の柔道思想について（その1）

——とくに柔術修業時代における 柔道思想への近接——

中京大学 前 川 峯 雄

はじめに

私は嘉納治五郎先生から直接ご指導をいただいた者でない。香川師範学校在学中（大正12年）高松の武徳殿で先生のご講演を聞いたこと、東京高等師範学校の校庭で先生のお歩きになられている様子を何度かみたことがある程度であって、これから述べようとするのは、講道館：「嘉納治五郎」、大滝忠夫「嘉納治五郎、私の生涯と柔道」（新人物往来社、昭和47年）などに記載されている先生の自伝、あるいは自筆によるものをもとにし、その他、加藤仁平「嘉納治五郎」（逍遙書院、昭和39年）をも参考にした。随分いい加減のところがあるかもしれないが、その点をお許し願いたい。

ここで述べようとするのは、嘉納治五郎先生が、自ら創始された柔道を、単にスポーツの一種目として行われている「柔道」とは違って、広くは体育、処世に及び、さらには、人間のあり方についての根本原理を示すところのものとされたことに魅惑され、これまで体育のことについて考えて来た関係上、日本の体育思想研究の中核的なものとして研究するためである。

わが国の体育研究をしようとするとき、人はヨーロッパやアメリカの体育については詳しく知ろうとするが、わが国のスポーツ界や体育界に大きな影響を与えた嘉納治五郎先生のことについて素通りする傾向があることに対して、前々から再検討したいと思っていたことがある。この際、嘉納治五郎先生について知ろうとすれば、何はさておいても、今の柔道ではなく、先生自身のいだかれた「柔道」をよけて通ってはい、日本の本当のものを見失うおそれがあると考えていた。

したがって、嘉納治五郎の柔道思想の研究は、ただ柔道の思想というよりも、すぐれた日本の教育や体育をあらしめるための嘉納の柔道思想がどのようなものであったかを明かにすることを目的としているのである。

もちろん嘉納先生の柔道思想は一日にして成ったものでない。(1)柔術に打ち込んで柔道創始への基礎をつくった時期、(2)始めて柔道の体系化を図ろうとした時期、(3)その完成された時期などにわけることができるであろうが、ここでは、明治15年嘉納23歳になって講道館を創始し、そこで柔道を指導するようになる前の、いわば柔道創始の前駆的時代に目を向けて、その取り組み方や物事に対するかれの態度について明かにしようとするのである。丁度これは、嘉納の14歳から僅か9年足らずの間であるが、そこには体育研究者の学ぶべき沢山のものがある。23歳といえば、今では大学を卒業したばかりの年齢である。制度もない、組織もない、その上武術の一つとしての柔術などにほとんど目もくれなくなったこの時代に、柔術の修業を志したことから既に知りたところである

が、今の高校に相当する時期、大学生に相当する時期に嘉納は何を考え、何をしようとしたかを明かにすることは、現代の体育や教育のあり方を検討することにも関係がある。とにかく、この若き日に、偉大な仕事の萌芽が育てられたことだけでも驚異的なことであるが、同時に若き日に専ら教え込まれることに汲々として、自ら何を為すべきかについて考えさせる機会さえも与えないところの現代教育に対する反省ともしたいのである。

事情が許されるならば、この稿につづいて「柔道の成立事情」「嘉納治五郎が到達した柔道思想の全貌」を研究させて頂き度いと思っている。

(1) 柔術への志向

嘉納治五郎が、講道館柔道を創始するに及んだ重要な契機となったものとして柔術との出会いをあげなければならないであろう。しかし柔術との出会いそのものは柔道創始の必然的な条件ではない。事実柔術をやっていたものは、明治になったとはいえども皆無でなかった。しかしその中で柔道を作ったのは嘉納一人であるからである。

端的にいったかれが柔術への志をいだくにいたったのは、柔道を創始するためではなくして、他に動機があった。それは、自身の健康の増進と、他に負けないほどの体力をつくり、これによって自己の弱点をカバーしようとするためであった。このような理由のもとで、まず柔術との出会いがみられるのである。

嘉納の自伝によると、明治6年かれが14歳のとき私立育英義塾に入学し、英語および普通学を学ぶことになった。そのとき「少年の間では、とかく強い者が跋扈して弱い者はその下風に立たなければならない勢であったので、これには残念乍ら常におくれをとった。」といっている。もう一つ、かれは身体的にひよわな方で「大抵の人に劣っていた。」そしてこれがもとで「往々他から軽ぜられた。」とももらしている。(大滝忠夫、上掲書、p. 18)

少年期に、友人間でひけめを取りたくない、できれば、他の上に立ち度いと願うのは誰にも見られることである。嘉納もこの点では他のものと余り変ったところがなかった。ことに、この頃直接関心をもつものは、知的なはたらきとか、人格的なものではなくして、腕力や体力の強さとか、あるいはからだの大きさのようなものである。嘉納は身体がひ弱で、身体的威力もなかったので、友人間でもつねに「その下風に立たされ」「他から軽ぜられた。」のである。このようなことは、誰しも経験するところであって、今も昔と変らないのである。ただ、今であれば、比較の要素が多くあって、一つのことに劣っていても、他の面ですぐれておれば、自己の安定性をもちつづけることができたのであるが、嘉納少年のころにはそれができなかった。「学問上で大抵の者には負けないとの自信がありながら」腕力の故に「人の下風に立たされる」(作興)ことを体験した。少年にとって、これこそ悲痛な心境であったに違いない。この場合、今の若者であればどうするであろうか。きっと親に話などして、救を求めるに違いない。しかしかれは、この悲痛な境地から脱出するために、親に話すのではなく、自らすすんで日本伝来の柔術をしようとしたのである。言葉を変えていえば、自己がいだいている身体的非力感や他からの制圧による劣等感を払拭するのに、柔術を求めたのである。自伝ではこの消息について次のように語っている。「幼少の時から日本に柔術というものがあり、それは……(中略)……非力ものでも大力のものに勝てる方法であると聞いているので、是非この柔術を学ぼうと考えた」(講道館、嘉納治五郎、p. 32)といっているのである。とにかく、今の中学生の年代に、これだけのことに思いつき、柔術への動機となったのである。

このような動機による柔術志向は、嘉納少年が開成学校に入学したころ(明治8年、16歳のとき)

いっそう強いものとなった。すなわち「開成学校にはいってみると、諸藩の進貢生以来の連中数多く集っていたので、ますます腕力の必要を感じた。……ここでは学問も勿論重んぜられたが……肉体的優越の必要はむしろ育英義塾以上であった。」(大滝, 前掲書, p. 18)そこで、14歳以来いっていた柔術修業への希望は一層切実なものとなったので、「親に乞うて、宅に出入の柔術家に教えて貰うように願ったが、父はそんな必要はない」として同意してくれなかった。現代の少年はこのような場合にどうするであろうか。嘉納少年の父の考えでは、柔術などはもはや過去のものとなって、通用しない。やるのならもっと当世流のものでもやるがよい、と思われたのかもしれない。この時、かれはどうしたというのであろうか。自ら語るところは次のようである。「自分も相当の年齢に達しているし、考えも多少出来ていたから、必ずしも親の世話にならずとも、適当な師匠を見出そう」(大滝, 同上, p. 18)と決心したのである。当時16歳といえ、もはや一人前にあつかわれていたのであろう。それだけの自覚が嘉納少年にはできていたのである。自分のことは自ら決し、自ら行うことのできる年齢に達したという自覚である。学校教育がこれほど普及し、教育技術もすすんだというのに、独り立ちの精神は余りにも育てられていない現代教育とちがったものを強く感じさせる。そして、親の助けを求めないで、自分で師を探し求め、それについて修業をし、本来かれが抱いていた念願を達成しようとしたのである。それにしても、かれのこの決意は現代教育において十分に取りあげなければならない要素をもっていると思うのである。自主性、自立性への教育として。

(2) 柔術の修行

この決心が実際に実現したのは、かれが東京帝国大学に入学した年である。この時、まさに18歳であって、今日の高校3年生か大学の1年生にあたる。詳しいことは「講道館、嘉納治五郎 pp. 31-48」にみられるので、ここではむしろ、柔道を創始する前段階として、どのように柔術に打ち込んだかをみよう。

かれの修業態度は、尋常一様のもものではなかったといわれる。大学の学生であり、勉学のかたわらこれに没入したのであって、自伝の中から、そのいくつかをみよう。

① わかるところまで師にぶつかる

さきの動機にもとづいて熱心に柔術家を求めて八方探し歩き漸く福田八之助(楊心流)の門下となったことである。嘉納は、福田からあるわざで投げられた。早速起きあがって「今の手はどうしてかけるのですか」ときくと、師の福田は「おいでなさい」といっていきなり嘉納を投げ飛ばした。かれはこれに屈することなく「この手はどう、足はどういたしますか」としつこく質した。すると師は、また「さあおいでなさい」といって投げ飛ばした。嘉納も「また三たび同じことをききかえした。」これに対し、福田は「何、お前さん方がそんなことをきいてわかるものか。ただ数さえかければできるようになる。さあおいでなさい。」同じことを聞く方もきく方なら答える方も答える方だ。しかし、このやりとりから、嘉納は「稽古はすべてからだに会得させるものだ!」と悟っている。大事なことである。キネシオロジーや運動力学では、現象を力学的に説明はする。しかし、それで直ちに、わざが会得できるものではない。わざの稽古をするのに、理屈の上での理解が先か、それともからだで覚えるところの試行(実践)が先かは別として、求めようとするものに出合ったならば、相手が誰であろうと、どのような態度でのぞんで来ようと、わかり切るまで、徹底的に追求していく態度が何物にも増して重要であるように思われる。一般には、一寸困難に出合ったならば、もう意図を放棄してしまうことが多い学習活動の中で、これをどこまでも追いつめてい

く態度が、既にそのころははっきりと見られ、これが、やがて一つの偉大な思想をうむ力となったのではないと思われる。

② 精 進

あることについての原理や根本の道理を、単なる観念としてではなく、実践にまで通ずる道として自ら体得しようとするとき、人によっていろいろのいき方があることを否定するものではない。

柔術の修業に打ち込み、その中から何ものかを自得しようとした嘉納は、特有のやり方を示しているように思う。筆者は、かれが打ち立てた目標にむかって、どのような態度をもって進んでいったかを知り度いと思った。そこで、嘉納が成人して後にものさされた自伝や嘉納をよく知っている人々が紹介しているものから、二、三引き合いに出してみようと思う。

(そのⅠ) かれが大学生になったばかりのころ、平素使いなれない筋肉をつかってどしどし柔術の練習にはげんだため、便所に行って立ちあがることが出来ないほどになったが「一日も休まず、ちんばを引きながら稽古をつづけた」と語っている。このような気魄を何とみるべきか。

現代の人々であれば、合理性に欠けるやり方であると非難するかもしれないが、自らやろうと決心して、自ら行うことに対して、これだけの根性はよほどのものでなければ発揮できないであろう。

(そのⅡ) 磯正智の道場で修業していたときのこと。そこには30人もの幹事がいたが、これらの幹事は休むことが多く、嘉納一人で相手をしなければならなかったことが多かった。その様子について「乱取だけでも30人の相手は容易でないが、形をうけた後にこれをやってのけるのは、なかなか難儀だ。」「いつも夕食をすませて道場へ行く。帰りは、おそいときには11時を聞いてからになる。あるときは、身体綿のごとく疲れ、途を歩きながらよろよろして、路傍の塀につき当ることもしばしばあった」と昔を思い出し「よくも病気にならずにすんだものだ!」と述懐している。後に「精力善用」を説いた人が、これだけのことをやってのけている。現代の人であれば、どうであろうか。帝国大学の学生で、昼は学問をやりながら、その余暇(といってよいかは別として)に、柔術を教えつつ、自らその道をつかむための精進、誰でもできることではなかろう。

とにかく、柔術の深いところを極め、それから柔道を開いていくのには、目前にはだかる凡ゆる困難をおしのけて、体当たりしていることが判る。真の意味での達人になるには、常人の道を歩んでいないように思う。非凡な素質の人が、永遠なるものを求めて、それに情熱を傾けて、あらゆる困難を排してつきすすむときに、たまたまえられたものが柔道であったといえないだろうか。

(3) 修 証

世の中にはあることにはげみ、精進・努力するものは決して少なくない。ただ、これによって何をつかみ取ろうとするかという点になると、人によってちがう。修業時代の嘉納には、問題意識があつて「柔術の練習」という行動をし、その行動の結果から、原理や原則を体得するという方式がとられている。それについても、一、二の事例をあげてみよう。

(そのⅠ) (身体の形成的効果)

柔術は身体の形成的効果をどれほどもつかについて、かれの論法は極めて興味深いものがある。曰く「遠足は、くたびれるわりには、身体の鍛練が出来ないことを見出した。」また、ベースボールやその他の球技は「面白い遊戯ではあるが、…全身を鍛えるというには不完全をまぬかれない。」船こぎ(ボートのこと)は「一日仕事である。」さらに「保養にいくのはよいが、身

体鍛練のためには、やはり効果がうすい。」これに対し、かれは自ら柔術を修して、その体験をもとにして「柔術ほど、ほんとうに身体を鍛練するものはない。」と「実感」したというのである。今のように、その成果を測定しているわけではないが、いろいろの経験をし、その結果を比較して、その中から何がすぐれているかを見ようとする。しかも、視点をあれこれ変えないで、ある点からみると、こうであると「実感」して、これをもって原理、原則を打ち立てようとしていることがよく判る。

(そのⅡ) (技術の発見)

嘉納は、後になって運動として行われる「柔道」のわざの体系を確立するのであるが、そのためには、経験的にいろいろな技術を自得していることが大切であった。それでは、どのようにして、わざを体得したのであろうか。これについて、いくつかの事例をあげてみよう。

まず飯久保恒年の門下生であったとき、および福田の門下生のときの事例をみよう。

福田の門下に福島兼吉というのがいて、どんなに努力しても勝てなかった。かれは、そのためにいろいろと工夫した。「西洋にはうまい手はないか」と湯島聖堂にあった図書館で、多数の本を調べていたところ「これはと考えた手のある本から見出した。」そこで、これを実際にやってみたところ「見事に福島をたおした。」若いかれは、そのときは何ともいえないほど愉快であったという。しかも、それは「勝てなかった福島を倒した。」という成功のよろこびとともに「努力の成果を見たという満足感」でもあったという。

いま一つ。技の名人といわれる飯久保恒年から乱取りの指導をうけていたときのことである。「先生（飯久保）と乱取をしていると、自分（嘉納）の投げがよくきく。……不思議にも先生から一本もとられず、自分のかけるわざがまことによくきく。」嘉納は、これはどうしてだろうかと考えた。その答はこうであった。「自分が相手の身体を崩すことを研究して自得した結果であった」というのである。さらに語を換えて次のようにも述懐している。「崩すということに特に集中して技をかけること、これを徹頭徹尾実行した」結果が、この日に現われたというのである（大滝、嘉納治五郎私の生涯と柔道 pp. 71～2）。われわれは、この語の中に、嘉納先生における原理や理法の発見過程が秘められていると思う。すなわち、いつも勝てない相手をどのようにしたら負かすことが出来るか、という問題に対して、(1)こうすれば勝てるかもしれないという試行の方針のようなものをうち立て、(2)この考えを実際にうつしてみる。(3)一回だけでなく、何回も成功すれば、先きに考えた方針は、正しいものであるとして、それを技の原理にまで作りあげる。さらに重要なことはそれが原理であることについて、証明しようとする。たとえば、上の場合についてみると「人の身体は押すか引くかすれば必ず崩れるものである。」「何心なく、ふと立っておるものは、その人が如何に体力のあるものでも、前から押せば後に傾き、これを引けば前に傾く。即ち崩れる。」また「相手が体力のあるもので、こちらの押すのを押し返せば、後には崩れない。……また引くとき引き返せば、前には崩れない」さらに「如何に体力のあるものでも、自分に引こうとするときに、こちらから押せば、相手は後に必ずよろける。」「こちらを先方が押すとき、こちらが引けば、前によろつくこと間違いのないことである。」これは、現代の運動力学的あるいはキネシオロジー的着想であって、こころに科学的原理をまず考え、これを実際にやってみ、何回やってもそれが真実であれば、それはあるわざの基本の方法となるという極めて合理的、科学的な考え方である。

要するに嘉納の柔術修業をみると、これまで同行者が無意識にかけていたわざをはっきりと意識し、さらに自らの工夫を加えてそれを試行し、その試行がねらっていた通りの結果にいたるならば、それだけに終らせないで、さらにその理由や根拠を尋ね、その理由づけができた

き、一つのまとまった技術として取り上げており、このようにして、柔術におけるわざの体系を打ちたてたようであるが、これはまさに天才的な研究の操作であるといっよからう。

(そのⅢ) (精神的効果についての自覚)

すでにみたように、若い嘉納は、柔術のたゆみない、生命がけの修業の結果、自身の中に起ってきた変化が何であったかと尋ね、そこで見出されたものを精神的効果として認識していくという、いわば自己観察法をしばしば用いている。次の例などは、その典型的なものではなかろうか。かれはしばしば過去にさかのぼって若き日の自己を眺めている。それによると、過去の嘉納は、いろいろな場面において「容易に激する」ので「非常に癪癢持」であったという。このような彼が、柔術に打ち込むようになるにつれて、どのように内面的な変化がみられたであろうか。かれによると「精神状態が次第に落ちついてきた」こと、さらには「自制的精神の力が著しく強くなった」ことを「自覚」したというのである。どうしてそうなったかについては明らかにしていないが、恐らく柔術の練習によって身体的な力がついてきたこと、他のものには圧倒されにくいことですむこと。他人の身体的圧力をうけて、自己の内部に影響を与えるようなことがなくなってきたこともその一つであろうと内省している。しかし、世の中には身体的な力はある、癪癢持の人格を有するものは少なくない。柔術の練習によつて何が生じたというのであろうか。これは、自己の精神的なあり方に対して、制御する力がついてきたからではなかろうか。柔術では、つねに相手と相対して、わざのかけ合いをする。相手があるので、自分の思うようにならないことも多々ある筈である。そのような相対的關係に自己をおくとき、ただ一人ずもうを取るように激してみてもはじまらない。結局は、相手を制圧する力をつけなければならないので、仮に激するような事情があっても、それを死にものぐるいの練習に転じていかなければ、すぐれたものにはなれない。自制心の発動はこのように考えられないであろうか。そして、遂にかれは、強い相手を制圧する方法を自得するにいたるのであるから、次第に、意に反して激するようなことはなくなるというのではなかろうか。

とにかく、かれの得たところの精神的効果は、練習による「人格」のつくり変えの結果とみなければならない。そして、このような効果についての自覚にもとづいて、柔術の人間形成的効果を語るところに、教育者としての嘉納らしさがあるように思う。体育運動によって、どんな精神的目標に近づくべきかを教えて、その成果について余り問題にしないものとは、根本的に違うところである。これも、自ら修し、その結果を証していくことを身につけた嘉納の独自のいき方とみることができよう。

(4) まとめ

本稿では尊敬している偉大な嘉納治五郎先生が、どのような過程を辿って、その境地に到達されたものであるかを、柔術の修業を通してかいま見たのである。とにかく、生れたときから偉大な先生があったのではなく、それに先行する少年期、修業時代があり、そこを通り抜けて、その偉大さを発揮することができたという予想のもとに研究をしてきたのである。

ここでは触れなかったけれども、若き日の嘉納先生は、すぐれた環境のもとにあったことを否定するわけにはいかないであろう。しかし、それだけではなくして、かれ自身に具っていた天稟をあげなければならないであろう。いわゆる少年期から人並はずれた着想をもち、その実現にむかって、常人では考えられないような修業をしている。自らを甘やかすことなく、死にものぐるいの行を積んでいる。

しかし、少年期にそうまでさせたものは何であったであろうか。われわれは、嘉納少年の「負けん気」というパーソナリティーを認めざるを得ない。幸い心身ともにすぐれた素質をもっていたが、彼には、この負けん気を発動させるような事態がいくつもでてきた。そのうちでも、少年期における学友との関係である。知能にすぐれた面をもちながら、なお身体的な面や体力で圧倒され、その天分を十分に発揮できない。しかし、そのとき「仕方がない」とあきらめないで、困難場面を脱出しようとして自らを燃焼させようとする。そのエネルギーは、結局かれの「負けん気」からでてくるものと思う。

少年期から青年期に入るにしたがって、問題意識も変ってきた。ただ友人や仲間との間の相対的な位置についての認識、それから発生する実践から次第に高い次元の問題を注目するようになる。ここでは柔術についてのみみたのであるが、とにかく自己が拡大していくにつれて、自ら行じているものの本質を極めようとする。最早、他の圧力に抗して、どのように自己力をつけるかという業行ではなくして、永遠なるもの、普遍的なものへの近接に強い関心を示すようになる。そして、この関心にもとづいて思考し、実践し、修証したものが、やがて一面では「柔術から柔道」への転換となったのではなかろうか。偉大な嘉納先生も一日にしてなったのではなく、長い希望多い道程に、自己を没入した日目があったことを見ることができるのである。